



なぜフェアトレードなのか

渡辺 龍也 Watanabe Tatsuya 東京経済大学 名誉教授

日本放送協会(NHK)、国際機関、国際協力NGO等を経て、2000年より東京経済大学教員。主な著書に『フェアトレード学』(新評論、2010年)、『フェアトレードタウン』(新評論、2018年)がある

前回はフェアトレードについて概略を説明しましたが、今回はなぜフェアトレードという取り組みが始まったのか、必要とされているのかについてお話ししたいと思います。それには大別して①途上国の人びとが置かれた状況、②国際貿易のしくみ、③先進国の貿易・援助政策の3つの理由ないし背景が挙げられます。

途上国の人びとが置かれた状況

前回、途上国の生産者や労働者の人たちが作った物が買い叩かれていたと述べました。この「買い叩き」についてまず説明しましょう。生産者の人たちは、作った物を市場まで持って行ければ買い手を選んで多少は高く売ることができます。でも、零細な貧しい生産者はトラックはおろか馬やロバさえ持たず、遠くに住んでいけば背負って行くこともできません。結局、売る先は村まで買いにくる「仲買人」だけとなります。商売上手な仲買人は生産者の足元を見て値切ってきます。カカオ(チョコレートの原料)、コーヒー、果物などの生ものは売り渋ると腐ってしまうので、生産者は泣く泣く安値で売らざるを得ません。これが「買い叩き」というものです。先進国の企業が安値を要求すると仲買人も一段と買い値を下げるため、買い叩きに拍車がかかります。

生産者は次の収穫期の前に持ち金が尽きると、借金をしてしのがねばなりません。でも貧しい生産者に誰が貸してくれるでしょう。唯一貸してくれるのはあの仲買人です。彼らにとっては高利で貸すチャンスでもあります。一度高利で借りると待っているのは「借金地獄」です。ふく

れあがる借金を返せない生産者は仲買人に頭が上がりず、ますます言い値で売り渡すしかなくなります。こうして仲買人は、「生かさず、殺さず」の状態です。

バナナや紅茶、綿花を栽培する大農園(プランテーション)で働く労働者も植民地時代さながらに重労働を強いられ、奴隷状態で働かされることすらあります(特に借金のかたに取られた債務労働者)。先進国向けに衣服を生産する縫製工場やサッカーボールを手縫いする工房も同様です。監禁されて火事になっても逃げ出せず、焼死するという痛ましい事件も起きています。

それらの農園や工場、工房では「児童労働」も絶えません。従順で安く使える児童は好都合です。学校にも行けずひたすら働かされる子どもたち。その数は世界全体で1億6000万人に上るといいます(ユニセフ調べ)。

以上のような、「苦境」という表現では生易しい苛酷な状況に置かれた生産者、労働者や子どもたち——彼らに人間らしい暮らしを！と取り組むのがフェアトレードなのです。

国際貿易のしくみ

かつて先進国に植民地支配された途上国では、今も「モノカルチャー(単一栽培/生産)経済」から抜け出せない国が少なくありません。モノカルチャーとは、先進国が欲するわずか1種類から数種類の農産物や鉱物(合わせて一次産品と言います)を生産させるしくみのことで、スリランカの紅茶、ガーナのカカオ、キューバの砂糖、ザンビアの銅などが代表的な例です。

表 一次産品価格の推移

一次産品価格の推移	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	2020-22年	2020-22年 / 1960年代
コーヒー(アラビカ種)	4.47	5.69	4.64	3.01	2.47	3.70	4.21	0.94
紅茶(スリランカ産)	3.94	2.33	2.16	1.96	2.33	3.28	3.28	0.83
カカオ	2.80	4.34	3.03	1.58	2.00	2.60	2.27	0.81
砂糖	0.37	0.65	0.35	0.27	0.26	0.38	0.34	0.92
綿花	3.23	3.41	2.43	1.89	1.50	1.95	2.08	0.64
ゴム	2.60	1.75	1.50	1.15	1.64	2.40	1.77	0.68
バナナ	0.75	0.56	0.61	0.56	0.69	0.98	1.23	1.64
銅	5.03	4.08	2.68	2.61	4.32	6.53	7.61	1.51
錫(スズ)	15.0	19.0	16.6	6.76	9.97	19.8	25.2	1.68

World Bank Commodity Price Data (2023年4月)より筆者作成
農産物は1kg当たり、鉱物は1000kg当たりの実質米ドル価格

独立後も途上国が一次産品を生産・輸出し、先進国から工業製品を輸入するという“国際分業”は続いています。工業製品は技術革新等によって付加価値の高い製品が次々と生み出されますが、一次産品は付加価値を付けるのが難しいため交易条件が悪化して(=より多く売らないと工業製品が買えなくなって)いきます。

上の表をご覧ください。1960年代から今日までの一次産品の実質価格(各年代は10年間の平均値、2020-22年は3年間の平均値)の推移を示した表です。表中の赤字は各一次産品の年代ごとの最高値、濃い青字は最安値、薄い青字は2番目に安い価格を表しています。

これを見ると、バナナと鉱物を除く一次産品の価格は1960年代ないし70年代に最高値を付けたあと下落して1990年代前後に最安値を記録し、その後は(中国、インド等の新興国で原材料や嗜好品への需要が高まったりして)多少持ち直しています。直近の2020-22年の価格を1960年代と比べると、バナナと鉱物を除く一次産品は1960年代を下回っています。つまり50年以上前よりも安い価格で取引されているわけで、生産者や労働者の人たちの生活がいかに苦しくなったかご理解いただけるでしょう。

では、1990年代前後に最安値を記録したのはなぜでしょう。それ以前は、一次産品価格の安定と向上を図る「国際商品協定」というものが途上国と先進国の間で結ばれ、機能していました。つまり、一次産品を生産する途上国に最低限度の

価格を保証する“フェアトレード的”なしくみが政府間にあったのです。

ところが、1980年代に先進国で力を得て世界に広まった「新自由主義」政策により、国際商品協定は破棄ないし機能停止に追い込まれました。「新自由主義」というのは、政府の介入を極力抑え、市場や企業の自由な振る舞いに任せることで経済の効率化・活性化を図る経済思想で、

政府が介入する国際商品協定はその標的となり、崩壊させられたのです。生産者を守るために途上国の政府が一次産品を買い上げたり生産を支援したりするしくみも“介入”に当たるとして縮小・撤廃を迫られました。

1990年代はまた「グローバリゼーション」に突入した時代で、自由の翼を得た先進国企業は世界を股にかけて活動し始めました。合併と買収(M&A)を繰り返し、グローバルな「メガコンペティション(大競争)」に勝ち残った大企業は市場支配力、価格決定力を強め、一次産品価格をいっそう押し下げました。

このようにして、一次産品は1990年代前後に史上最安値を記録したのです。単年の史上最安値は最盛期の3分の1から4分の1にまで落ち込みました。国際的にも国内的にも支えを失った途上国の生産者や労働者の人たちは、むきだしの自由貿易の荒波に放り込まれ、底なしの貧困の淵に沈んでいったのです。

そうした極貧の渦中にある人々に最低限度以上の価格を保証する、まっとうな取引、貿易を推し進めたのがフェアトレードでした。

先進国の貿易・援助政策

新自由主義を世界に唱道した先進国主導のもと、「自由貿易」の推進母体となる世界貿易機関(WTO)が1995年に発足しました。自由貿易とは、手短かに言えば関税や輸入割り当て、規制などの障壁をなくして自由に貿易できることを

言います。それが本当に望ましいかどうかは別として(例えば自国の環境や労働者を守ろうとして規制を強化すると、規制が緩い国のモノやサービスを“不当”に排除するとして提訴/報復されたりする)、どの国も等しく自由に貿易できれば少なくとも平等、公正とは言えるでしょう。ところが現実はそのようではありません。

WTO発足以前の通商交渉では、主に先進国が生産し輸出する工業製品について自由貿易のルール作りが進められ、ほぼ実現しました。2001年に始まったWTO下の通商交渉は、「ドーハ開発アジェンダ」と名付けられたように、貿易を通じて途上国の開発を後押しすることが一大目標とされ、途上国側は農産物の貿易自由化に大きな期待をかけました。それが実現すれば途上国の主要な産物である農産物の輸出を大きく伸ばすことができるからです。しかし、途上国産の安い農産物から自国の農家を守りたい先進国側が難色を示し続けているため、交渉は完全に行き詰まり、農産物の貿易自由化はいまだに実現していないのです。

先進国は途上国産の農産物の輸入に抵抗しているだけではありません。自国の農家に多額の補助金を出して輸出を後押ししているのです(途上国に対しては農業補助金の縮小・撤廃を要求しておきながら)。多額の補助金がもらえる欧米の農家は生産コスト以下の安値で国際市場に売り出せません(ダンピング輸出と言う)。そのため、例えば本来は高いアメリカ産のトウモロコシが、その原産地であるメキシコのものより安くなってメキシコに流れ込むという逆流現象が起きました。作っても売れなくなったメキシコの農家は食べるためにアメリカに“不法”越境し、底辺労働者になっていると言います。

先進国は自分たちが輸出したい工業製品のためには“自由”貿易を唱えて途上国の市場をこじ開けながら、途上国が輸出したい農産物に対しては自国市場を閉じる(=保護貿易)だけでなく、補助金で競争力を付けさせた農産物を途上国市場

に売り込む——何と手前勝手なことでしょう。現実の“自由”貿易は、先進国にとっては“自由”そのものですが、途上国にとっては“不自由”な「不公正貿易」なのです。

まやかしの“自由”貿易ではない、途上国にとっても「公正」な貿易の実現をめざすのがフェアトレードなのです。

公正な貿易を求めてきた途上国に対して、先進国は「援助」することで要求をかわしてきました。その援助の大半は、途上国の工業化・都市化を支援する「近代化」という考え方に基づいたものでした。近代化を進めれば、その果実が次第に農村部や貧困層にしたり落ちていって貧困問題も解決するとされてきました(トリクルダウン理論)。しかし、トリクルダウン効果は、あっても微々たるものだったため、貧困問題に正面から取り組む必要性が認識され、貧困層に直接届く援助が農業、教育、医療、小規模金融などさまざまな分野で行われるようになりました。国際協力NGO(市民団体)も、先進国政府による援助以上に貧困層に寄り添った支援をしてきました。そうした援助は成果も上げてきましたが(特に自然災害や紛争が引き起こす緊急事態や人道危機に際して)、弊害があったことも事実です。

最大の弊害は援助への「依存」です。援助が潤沢で手厚ければ手厚いほど、人は「援助してもらおう」ことに慣れっこになり、自身で努力するのをやめてしまうものです。私も長年国際協力にかに関わるなかで、そうした場面を数多く見ました。依存するのは途上国の人たちが怠け者なためではまったくなく、人間の本性と言えるものです。援助はまた“一方通行”の行為で、「してあげる」「してもらおう」という上下関係を生み出し、援助を受ける人たちに卑屈な思いをさせることも少なくありません。

依存を招く援助とは違って自助努力を促し、双方向の対等な関係を築いて、人々に自信と自尊心をもたらすような公正な「ビジネス」を実現するのがフェアトレードなのです。